

# ブータン王国訪問 調査報告書

長崎県議会ブータン王国訪問団

2012/5/14

## ■調査メンバー（長崎県議会ブータン王国訪問団）

1. 楠 大典
2. 渡辺 敏勝
3. 山口 初實
4. 高見 健
5. 末次 精一
6. 友田 吉泰
7. 松島 完

## ■調査期間

2012年4月10日(火)～4月15日(日)

## ■主たる調査訪問先

- ・ Ministry of Education（教育省）  
Ms. Zam Sangay, Secretary 教育省次官
- ・ Lungtenzampa Middle Secondary School（中学校）
- ・ Gross National Happiness Commission（GNH（国民総幸福）委員会）  
Mr. Tshiteem Karma, Secretary 国民総幸福委員会長官
- ・ Members of the National Assembly（国会議員）  
Mr. Penjore Sonam and Ms. Lhamo Karma
- ・ Department of Bilateral Affairs, Ministry of Foreign Affairs（外務省）  
Mr. Penjor Thinley, Director 外務省 二国間局長
- ・ Dzongda(Governor) of Punakha（プナカ県知事）  
Mr. Tshering Kunzang N.
- ・ 一般民家(農家)訪問

## はじめに

左手には山、右手にも山。山と山の間をぬけると、そこはブータンであった。機内の小さな窓から、“眼下に広がる”ではなく、目の“横”、いやむしろ目の“上”に雄々しくそびえたつ高い山々の間を小さな飛行機が飛び、飛行機が山にぶつかりはしないかという不安感といよいよ幸福の国ブータンに降り立つという高揚感に包まれ、着陸した。

ヒマラヤ山脈の東側に位置し、人口約 67 万人<sup>1</sup>、国土面積は九州の 0.9 倍である小さな国である。ブータンをあらわす言葉は、おそらく以下に集約される。

「GDP（国内総生産）より GNH（国民総幸福）を重視する。」

「物質的な豊かさより、精神的な豊かさを大事にする。」である。

GDP の成長を至上命題とするのではなく、GNH を高めることを最大の目標とするとブータン王国の第 4 代国王が宣言したのが、1972 年のことである。経済至上主義では国民の幸福は達成されないとするもので、昨今は国連をはじめ各国が注目する概念となった GNH だが、当時は世界的にはまったく注目されず、世界的な市場経済重視の流れの中で唯一その流れに乗らなかった国と言えるかもしれない。

物質的な豊かさより精神的な豊かさを重視するとした国の方針は、国民の 97%が「あなたは幸福ですか」との問いに「はい」と答える 2005 年の国勢調査の結果につながっている（「とても幸福である。」「幸福である。」と答えた割合の合計が 97%）。また、最新の調査では、「生活に満足しているか」との問いに「はい」と答えたブータン人の割合は 83.6%であった<sup>2</sup>。

長崎→福岡空港→台北→香港→インド→ブータン、この一連の大移動は人間の体力を奪うには十分であったが、ブータンのパロ空港へ着いた安堵感と、雄々しい山々に囲まれた独特の雰囲気は我々の疲れを忘れさせるものであった。長崎空港よりも小さい空港であったが、伝統的建築の建物は温かみを覚え、そしてまた日本人の外見と非常に似ているブータン人は親近感を感じるものであった。

---

<sup>1</sup> 大橋照枝（2010）『幸福立国ブータン—小さな国際国家の大きな挑戦』白水社、p.19 には人口 67 万人とある。現地でガイドに聞くと約 70 万人と言っていた。

<sup>2</sup> The Centre for Bhutan Studies 『GNH Survey Findings 2010』によるデータであり、「とても満足している」と答えた人が 18.4%で、「満足している」と答えた人が 65.2%である。それらの合計が 83.6%である。

## 1. 調査目的（※渡航前に書いたものを加筆修正）

ブータン国王夫妻が日本メディアを席卷したのが、2011年11月のことである。若い国王夫妻の訪日は、日本中の興味をブータンという国に向けさせた。被災地への金銭的援助（100万ドル=約8,000万円）<sup>3</sup>だけではなく、被災地へ実際に足を運び祈っていただいた国王夫妻のその姿に多くの日本人は感激をした。金銭的援助に対する感謝とともに、実際に訪問し祈っていただいたその姿勢に感謝の念を抱かずにはおれない。

訪日していただいた第5代国王夫妻の注目もさることながら、最も注目すべきは先代である前国王（第4代国王）が1972年に提唱したGNH（Gross National Happiness：国民総幸福）という概念である。それは、GDPよりもGNHを重視するという考え方であり、先進国が重視しがちな物質主義とは一線を画す独特のものとなっている。

我が国日本は、世界に類を見ない急速な経済成長を遂げたが、その成長が鈍りさらなる経済成長が見込めない現状の中で、進むべき日本社会の在り方を見出せていない。安直にアメリカ型社会が望ましいかそれともヨーロッパ型社会かの議論もあるが、それよりも確かなこととして言えることが、経済成長が国民の幸福につながっていないということである。日本は右肩上がり経済成長を遂げ物質的豊かさを享受してきた一方で、生活全般への満足度は1978年と2005年との比較で生活全般に「満足している」と答えた人の割合が三分の一まで減っており、たった3.6%である<sup>4</sup>。

このことが示唆することは、もちろん幸福感は個人の主観による部分があるが、住民の福祉の向上に寄与する目的を掲げている国や自治体の役割は一体何なのか、方向性が間違っているのではないか、そのような疑問が喚起される。

特質すべきことが、ブータン王国による2005年の国勢調査では、ブータン国民の約97%が暮らしに幸せを感じているという驚くべき結果が出ている。経済規模で比較するならば、日本よりも非常に小さいことは確かであるブータンが達成している幸福感は果たしてどのようなものなのか、どのようにして達成しているのか、これらを調査することが大きな一つの目的である。以下、いくつか具体的に列挙する。

---

<sup>3</sup> 田中敏恵（2012）『ブータン王室はなぜこんなに愛されるのか—心の中に龍を育てる王国のすべて』小学館、p.29。

<sup>4</sup> 平成19年度版国民生活白書（2007）によるデータ。補足すると、2005年の「満足している」と答えた方の割合は3.6%で、「満足している」と「まあ満足している」との割合を足しても35.8%となっている。この数値は過去最低。

- ①GDP よりも GNH を重視するその意図は何か。
- ②GNH の指標の内容について詳しく知りたい（全体論）。
- ③GNH の指標の9つの領域（心理的幸福、自然環境、健康、教育・教養、文化、基本的な生活、時間の使い方、地域共同体の活力、優れた統治）の中で、特に、心理的幸福と地域共同体の活力についてなぜその指標を掲げているのかとその指標の詳しい中身について学びたい。
- ④GNH の指標は、主観的指標と客観的指標があるが、そのバランスをどのように考えているのか。
- ⑤2008年に初の総選挙が実施されたが、世界的にも珍しい王の主導による民主化によってつくられた議会の仕組みとGNHに基づく議会の役割を知りたい。
- ⑥GNHの思想に基づいて、医療と教育が無料であるとのことだが、GNHに基づく独自の教育政策があるのか。仏教（宗教）がどのように教育と結びついているのかも興味深い。

## 2. 調査実施により期待される効果（※渡航前に書いたもの）

2012年3月、長崎県議会は議会基本条例を全会一致で可決した。その条例の目的は、「県民の幸福へ寄与する」ことである。幸福の追求は容易ではないが、そのことに正面から向き合う必要があり、長崎県民の幸福へ寄与することを追求していかなければならない。そのきっかけをこの調査が与えてくれるものとする。

これまで信じられてきた物質的な豊かさが幸福につながるという考え（経済至上主義）に、ブータン王国の政策は真っ向から反している。物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが昨今我が国でも求められるようになり、このブータンのGNHという考え方には国連や多くの国々が注目をしている。我が国の地方自治体でもこのGNHに着目し、独自の政策を模索する東京都の荒川区や熊本県などがある。

殊に長崎県がこの幸福を研究していかなければならない理由がある。長崎県は独自調査で平成12年から3年ごとに大規模なアンケートを実施している。その中で特筆すべきことが、「日常生活の満足度」の調査である。平成21年度の結果を見てみると、日常生活の総合的な満足度で、「満足」と答えた県民の方の割合は、たった2.6%である。これは過去最低を記録している<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> 平成21年度長崎県県政アンケート調査報告（2010）によるデータ。補足すると、「満足」と答えた方の割合が2.6%で、「やや満足」と答えた方が27.8%で、それらの合計が、約30%となっている。これは、前回調査（H18）約46%から大幅ダウン。

加えて、“県の政策の総合的な満足度”というアンケート調査もあり、県の政策に対し「満足」と答えた県民の方の割合は、何とたった0.7%である。これも日常生活の総合的な満足度と同様、過去最低を記録している。

日常生活に対する満足度の低さと、県の政策に対する満足度の低さを県議会も行政も真摯に受け止めなければならない。さらに、過去最低を記録していることを真剣に考える必要がある。この数値が意味するものは、県の政策の方向性が県民の方々の思いとずれているということではないか。県民の皆様の幸福に寄与する上で、長崎県の現状をしっかりと踏まえ、ブータン王国の97%幸せだと答えた国民の状況とその背景にあるGNHという概念を長崎県は学ぶ必要があるだろう。これらの満足度の異常な低さに一石を投じ、満足度が高まる契機となる調査としたい。

### 3. 調査実施を経て

#### (1) GNH (Gross National Happiness :国民総幸福) について

GNHは当時の経済指標の軸であったGNP(今の軸はGDPとなっている)に対抗する形で創出されたと考えられる。GNP(Gross National Product:国民総生産)に対抗する形で、Gross National “Happiness”となった。Product(製品)ではなくHappiness(幸福)としたことがこの概念をわかりやすく説明している。それは物質ではなく精神に軸をとったと換言できる。つまりは、経済指標も大事だろうが、それはゴールでなく幸福への通過点の一つという考え方であり、最も大事な究極目標を“幸福”と明確に掲げたということである。

GNHの4本柱は、Good governance and democratization(良き統治と民主化)、Stable and equitable socioeconomic development(安定的で公平な社会経済の発展)、Environmental protection(環境保護)、Preservation of culture(文化保護)の4つである。この4つの柱からさらに具体的に掘り下げたのが9つの重点領域である。以下がその重点領域である。

- ① Psychological well-being(精神的な豊かさ)
- ② Community vitality(地域の活力)
- ③ Health(健康)
- ④ Education(教育)
- ⑤ Standard of Living(生活水準)
- ⑥ Good Governance(良き統治)
- ⑦ Cultural Diversity(文化の多様性)

## ⑧ Time Use(時間の使い方)

## ⑨ Ecology(環境)

これらの9つの分野から、さらに具体的に分野ごとの指標をいくつもつくり(総計で72もの指標)、細部にわたって国民の幸福を調査している。それに基づき国の政策を決定している。国民の幸福は主観的なものであるからして行政体の施策とは距離を置くとする考えに真っ向から反対している。国民の幸福に正面から向き合っていると言える。

GNH委員会という組織があり、それは各省庁を束ねる形で各省庁の上位に存在する。我々がお会いしたGNH委員会の長官は、政府のナンバー2であり、ナンバー1は首相であるからして、そのGNH委員会の重要さが計り知れる。憲法の中にも、GNHの推進が謳われており、GNHの推進は国是とされている。まさに、ブータン王国の根幹はGNHである。

そもそもなぜ、これだけGNHを核とするかということ、物質的な豊かさだけでは幸福は得られないとする考えがある。物質的な豊かさも大事だが、もっと大事なものが精神的な豊かさとする考えがある。その両者のバランスをとろうとする考えである。確かに、我が国日本を見ても飛躍的に伸びた一人当たりGDPと生活満足度はまったく比例していない。今やGDPは豊かさを表す万能薬ではないことが明らかになっているが、その理由は、例えば戦争がおこれば金銭的支払いが生じGDPは上がる。また、環境破壊などの人間社会でマイナスとされることであっても、そこに金銭的支払いが生じれば、GDPを押し上げる要因となる。逆に、金銭的支払いが生じない世界(例えば家事や介護)はGDPには何ら関与しない。GDPと幸福の関係はしっかりと考える必要がある。

補足として、今や世界各国が注目することとなったGNHは、その政策そのものがソフトパワーとなり、世界の中でのブータンの存在を明確にするものとなっており、各国の視察団を呼ぶ観光資源にもなっている。伝統建築(建物は伝統建築を遵守しなければならない)や民族衣装(公の場では民族衣装を着用しなければならない)などの伝統文化を守り、自然環境を守り、意図的に近代化を急がないとするブータンは、それらの政策そのものがソフトパワーとなり、観光資源になっている。まさに、ゼロ円観光政策ではないだろうか。「ブータンがブータンであること」が観光政策に成り得ることは、テーマパークを誘致することと対極にある。何らかの施設、それに基づく道路、これらをつくることによって観光資源とするのではなく、そのままを見てもらうことが観光資源となることはまさにスマートであり持続的で強い観光政策と成り得る。

## (2) 教育について

ブータンでは、教育と医療が無料で受けられる。このための予算は歳出の約3割を占めている。独特な教育体制で、6-2-2-2でその上に大学がある。クラス6まで（Primary School）がいわゆる日本でいう小学校にあたり、クラス8までが Lower Secondary School と呼ばれ、クラス10までが Middle Secondary School と呼ばれ、日本でいう中学校に近い。クラス12までのものが Higher Secondary School と呼ばれ、日本でいう高校に近い。年齢による区分けではなく、学力によって分けられ、例えばクラスの中に8歳の子もいれば12歳の子もいるという。落第があるので、生徒はうかうかしてはいられない。

ブータンの学校は、小学校から英語が必須で、国語以外は英語での授業となる。国語は母国語のゾンカ語で学ぶ。国語以外の科目はすべて英語での指導となる。なので、英語が堪能なブータン人が多い。英語での指導によって独自の文化がなくなりそうに思えるが、それがほとんど見受けられない。むしろ、英語に堪能な人材の育成によって、グローバル社会に対応している効果の方が目につく。

教育政策の核はGNHだと教育省次官は言っていた。知識の詰め込みというよりも、生き方の指導に重視を置いていることが散見された。指導というより教師自体が模範となる行動をすること、行動で示すことを重視している。また、全教科にGNHの考え方を導入しており、例えば算数では、シェアすることの大切さを教えるという。Aさんが2個のリンゴを持っており、Bさんは1個、Cさんは0個の場合、分け合うと、それぞれ1個になる。この重要性を教えるという。独占でなくシェアすることの価値を教える、それが幸福へつながることを教えるという。

また、GNHの考え方の一つとして、瞑想の時間を設けており、それが子どもの集中力を増す科学的調査結果が出ているという。悩みやストレスなどにも瞑想をすることによって、心を落ち着けることができ、冷静な判断のできる子どもになるという。特筆すべきは、宗教のための瞑想ではないと教育省次官も現場の教師も言われていたことである。ブータンは国教がチベット仏教であるが、ヒンズー教徒もおり、キリスト教信者もいる。「信じる宗教は何でもいい、大事なことは祈ることだ」とGNH委員会の長官は言われていた。仏教や宗教のための瞑想ではないという。

実際にブータンの中学校を訪れて驚いたのが掲示板に、「幸せとは」と書かれてある紙が貼られていたことである。ちなみにその横には、コンピューターの授業プログラムが書かれた紙があり、パワーポイントの授業やワードの授業の予定が書かれてあった。その「幸せとは」の紙であるが、以下のように書かれ



であった。「幸せとは、愛の価値を知っている人々のことである。幸せとは、目標を達成するために懸命に頑張る人々のことである。幸せとは、年上や年下の人たちを尊敬する人々のことである。幸せとは、常にポジティブに考える人のことである。幸せになるために、善い行いをし、善い行いを見て、善き人であれ」この文を見て、率直に驚いた。なぜなら、中学生を対象に幸福論を説いているからである。確かに、日本でも小学生の頃に道德の時間があったが、これほど成熟したものではなかった。ブータンの子どもたちの方がもしかしたら大人っぽいかもしれない。子どもたちに、真正面から幸福を論じていると感じた。

さらに、実際の経験を重視しているようで、農業体験もカリキュラムの中に入っているという。実際に農作業をしている女生徒を見たが、楽しんで耕していた。外務省の幹部の方が言っていたが、ブータン人は欧米や日本、インドなどに留学しても99%の人が帰国して自国のために尽くすという。幼少の頃からのGNHに基づく教育が影響しているのかもしれない。

### (3) 議会について

2008年、ブータンは世界で最も新しい議会制民主主義国となった。王が主導して民主化を実現するのは世界的にみて稀有である。通常、王に権力が集中し、それを王が欲しいままにしたことによって、民衆の蜂起が起これば革命が起こる。通常、王との対立によって生まれる革命が民主化を実現するが、ブータンの場合、王が主導したのである。王が自らの権力を手放したのである。しかも驚くべきことに、国民からは「民主化する必要はない」、「王の主導のままがよい」とする声が少なくなかったという。そんな国民に対して、王(第4代国王)は、「善良な国王が治めているときはいいが、将来、暴君が出てくればこの国はおかしいものになる」と民衆をひとりひとり説いて回ったという。自らを律し、自らの権力を手放すことは極めて稀有ではないだろうか。この王の下で国であるからして、万民の幸せは達成できているのかもしれないと思わせる。

民主化に伴い、設置された国会は、二院制である。上院が25名のうち20名は20ある県の代表者で選挙によって選ばれた。5名は国王によって選ばれ任命された。下院が47名で、小選挙区制の政党選挙で選出された。2008年3月の下院選挙で、ブータン調和党(保守系)が国民民主党(革新系)を大差で破り、47議席中45議席を占め与党となっている。補足だが、ブータンの選挙権は18歳以上で、有権者数は40万人であり、王族と僧侶は投票権がなくなり、完全な

政教分離となった<sup>6</sup>。

#### (4) ブータンが抱える課題

1999年にインターネットとテレビが解禁になり、携帯電話は2003年に解禁になった。街中では多くの人が携帯電話を使っている様子が見受けられた。ブータン訪問中に何度か同じ議論をした一つが、テレビやインターネットが与える影響についてである。テレビやインターネットは他の先進国の豊かさ（物質的）を知るきっかけとなり、それは欲望を刺激する要因に成り得る。「あれが欲しい」とか「あんな暮らしをしてみたい」とかいう欲望が助長され、今の暮らしに充足感が得難くなることが考えられるが、2005年の国勢調査（97%が幸せ）から見れば直接的な影響はないようだ。だが、今後の一般家庭への普及に比例して影響は必至ではないだろうか。おそらく、影響が出てそこで教育や政府の役割が必要となるだろう。GNH委員会の長官もプナカ県知事もテクノロジーはとても大事でその普及を推進していくと言っていた。そして、「テレビやインターネットは、確かに良い面と悪い面の両面あるが、情報を得ることがまず大事である。本当に悪い面は政府がマネジメントすべきだし、情報の活用を教育がマネジメントすることが大事だ。」と言っていた。

ただ、プナカ県知事は、若者の農業離れが深刻であると言っていた。いわゆるブルーカラーの職業を毛嫌いし、ホワイトカラーの職を望む若者が増えているということであった。農業が基幹産業であるブータンで、その農業を支える人材が減っていくことがどのように幸福感に影響を与えるか注視していかなければならない。考えられるのは、自給自足の生活とそうでない生活の比較では、もしかしたら前者が幸福感を得やすいのかもしれない。なぜなら、後者は食の選択肢が増えやすい傾向があり、それは欲望を助長しやすいからである。

また、地域格差の問題も顕在化している。地域別の一人当たり収入の平均は都市が約10万円なのに対し、地方は約3万円であった<sup>7</sup>。都市と地方の年収差が三倍以上あるのは、紛れもなく地域格差の問題がこれから進んでいくと思われる。加えて、識字率においても同じ出所のブータン研究所のデータによると、地域格差が浮き彫りとなっている。全体の識字率は約5割で、半分の人が読み書きできないことになる。この識字率の割合、都市で読み書きできない人の割

<sup>6</sup> 大橋照枝(2010)『幸福立国ブータン—小さな国際国家の大きな挑戦』白水社、p.110。

<sup>7</sup> The Centre for Bhutan Studies 『GNH Survey Findings 2010』によるデータであり、都市が68615ニュルタム（約10万円）、地方が21349ニュルタム（約3万円）であった。

合は 29%で、一方地方は 60%にもなる。この格差が国民の幸福感にどのような影響を与えるかは今後の研究が必要である。

さらに、町中で目についたのが、ゴミである。ペットボトル、スナック菓子の袋など日本でも見られるようなゴミの委棄問題である。予想以上に、散乱するゴミが見受けられた。ゴミ処理などのゴミ問題は今後も政府の重要課題であるという。

## おわりに

GNH はバランスをとること。ブータン政府の要人の方々と話せば話すほど、GNH が「バランスをとること」だと聞かされた。「よく勘違いされるが、我々は物質的な豊かさをも否定しない。」とも言われた。要点は、「物質的な豊かさと精神的な豊かさのバランスをとる」ということである。GNH という考え方は何が幸福かを知るきっかけとなっているような気がしてならない。

「ブータンは何十年か前の日本で、すぐ日本みたいになるよ」とブータンを観光で訪れていた日本人に言われたが、これはおこがましく感じる。アメリカの姿が幸せだとアメリカを追いかけてきた日本と、最初から物質的な豊かさと精神的な豊かさのバランスの先に幸せがあるとそのバランスの舵取りを研究しているブータンとでは大きな違いがある。ブータンをあたかも日本の後発と考えるのは大きな誤りである。幸福の研究において、日本がブータンの後発なのである。どちらが優れた国かを競うのではなく、それぞれが自国の幸福とは何かを知りそれを政策に反映させ、自国の幸福度を上昇させること、これが重要である。ブータン国民と日本の国民の幸福感はおそらく異なる。同様に、東京都民と長崎県民の幸福感も一致はしないだろう。それを知る出発点が GNH という発想である側面がある。

ブータンの特徴として、ブータンの治安の良さを感じた点が二点ある。一点目は、一人も客引きがいなかったことである。よく旅先で見られる執拗な売り子も見られなかった。押し売りもなかった。けして経済的に豊かではないのに、旅行者に近づき強引に売ろうとはしない。これはやはり価値観が経済一辺倒ではないからこそではないだろうか。一見、まったく売る気がないようにも見えるがそうではなくて、相手を尊重する精神がある。そしてまた、金を得なくても（貧しくとも）何とか食べていけるという精神があるような気がしてならなかった。

もう一点の治安の良さを感じたことが、日本の添乗員の方が訪問先で財布を落とした事件である。普通、旅先で財布を落としそれがもどってくる可能性は

限りなく低い。日本国内でも都市部では特にもどってくる可能性は低い。ここブータンではそれがもどってきたのである。先方からすぐに連絡が入り、無事財布はもどってきたのである。何ともブータンの治安、ブータンの人柄を表す事件であった。

結びに、二人の方の言葉を引用したい。一人目は、ブータン研究センターのカルマ・ウラ所長の言葉である。

「経済的に潤うために、家族との時間が犠牲になり、自然に触れることが少なくなり、やがて健康を害する。近代化が人々に弊害をもたらしたことを私たちは知っています。だから私たちは、注意深く近代化を進めていかなければならないのです。」<sup>8</sup>

もう一人が、退位されてもなお国民の信頼と尊敬を受けている先代の第4代国王の言葉である。

「美しい自然を100年後、200年後の子孫に残せるならば、私たちは世界の中で2周遅れのランナーであってもよい。」<sup>9</sup>

思えば、ブータンは平地が少なく、段々畑ばかりが目に入った。その光景は、ふるさと長崎県を思わせるものがあつた。その美しさは、造られた人工的な美しさではなく、素朴な美しさである。山々の雄大さとともに、伝統建築の美しさ、段々畑の素朴な美しさがある。その美しさを守ることこそ、後世のためにすべきことなのかもしれないと、この先代の国王の言葉は思わせる。長崎県は東京の方を見るのではなく、ブータンの方を見ることによって、幸せを知るきっかけを得る気がしてならない。

---

<sup>8</sup> アспектブータン取材班（2009）「幸福王国ブータンの智慧」アспект、p.15。

<sup>9</sup> 福永正明（2012）「世界一しあわせな国 ブータン人の幸福論」徳間書店、p.238。